

軍事・歴史・政治・経済研究紙

MONTHLY DAITOH-NEWS

本紙の年間購読は本体3,000円+税です。

父性なき社会規範

父性が規範を与える

精神分析学では、「神」という定義「は幼児体験による、「父性」のイメージである」と言っている。オーストリアの精神医学者フロイト(Sigmund Freud)は、「父が規範を与える」ということを科学的に説明した。人間の心理生活を下意識まで掘り下げたフロイトは、その潜在意識には欲望の領域内に、抑圧された性欲衝動(Libido/リビドー)の衝動を発生させる力(力)の働きがあると定義した。つまり幼児体験における父のイメージと、そこから起こる「上位自我」(super-ego)はその心理生活において、良心を中枢とする規範を作り、本能の奔流を制御して、リビドーの働きを帰すとしたのである。

人間の深層心理の中には幼児体験の記憶が刻まれていて、「父」とは、物凄いい力を秘めた持ち主で、また何でも知っていると言っているイメージを抱かせるものである、という意識が働いていると言っている。したがって生命が危険になったり、生活が困窮した時には「助け」てくれる「存在となり、全知全能(Omnipotent/完全無欠の知恵と才能)の遍在(Omnipresent/広く行き渡っている事)的存在をイメージしたもので、これを抽象化したものが「神」のイメージへと繋がった、としたのである。

そして欧米や中国では、父性は規範を与えられ、役割を演じて来た、と言いつ事が人間の歴史からも読み取れるのである。したがって父性は「権威の維持」とも解釈される。また父性に代わって、規範を与えてくれるのがカリスマ(Charisma/超人間的かつ非日常的な資質で、英雄や預言者などに見られるもの)的要素を持った人物となる。

こうした人物は宗教の教祖であり、イデオロギー的な代表者であり、天才的な政治指導者である。喩(たと)えば、キリスト教は父性の権威が規範を与えると言っている。「良心」を教義としている。父性に委ねるから「天にまします、われらの父」なのである。また一方、かつてのナチス・ドイツを組織したヒトラーは、カリスマ的に振る舞う事によって、ドイツ人を熱狂的に信奉させただけでなく、絶対服従する事によって、この上もない喜びを与えている。当時最高の幸福感をつくり出し、全体主義を強調したことによって国民生活は窮地に追い詰められ、大混乱を来していた。そしてこの上ない喜びを、ドイツの経済的な復活は不可能と信じられ、絶望視されていた。

こうした状況下にヒトラーが登場した。彼のカリスマ的に振る舞う姿は、多くのドイツ人を熱狂的にさせ、当時の青年層を服従させた。これこそが真の意味での「権威」であり、「父性」であったのである。更に一方、個人崇拜をタブー視する共産主義圏に於いても、カリスマ的指導者の原則は必要不可欠であった。

スターリン、毛沢東、ホー・チ・ミン、カストロ、金日成……らの共産主義圏に於いても、旧体制を打破し、新体制をつくり上げる必要があった。つまり父性に委ねて、社会の規範を構築すると言っている事は、必要不可欠な原則なのである。

また家長制度の崩壊は、「家庭の欠陥」を作り上げた。そしてこうした欠陥家庭で育った青少年は、ついに親殺しに至ったり、子殺しに至り、あるいは理由なき殺人に至るのである。私たちが多くの日本人は、戦後民主主義教育で、平等思想を学んだが、「平等」の本当の意味は、教育が側も、教わる側もついに分からず仕舞いであった。そしてテモクラシー社会における「平等」も然りであった。

父性と社会規範

「父性なき社会」は何を生むか。これに気付いていない日本人は非常に多い。歴史を振り返れば、第一次世界大戦終結後のヨーロッパでは、父性が失われたために、社会規範の崩壊の危機を招いた。

特に第一次世界大戦終結下のドイツでは、父性なき社会が表面化して、まさにローマ帝国以来の国家的な破産の危機を迎えていた。凄まじいハイパー・インフレが襲い、年率一〇〇%を超える物価高で、国内には大混乱が襲っていた。国民生活は無慥に破壊される寸前だった。父性なきが故である。

もともと父性を社会規範として、歴史を構築して来たヨーロッパ諸国では、父性の権威が次々に崩壊していった。父性なき社会の無規範(anomie)人々の日々の行動を秩序づける共通の価値や道徳が失われて、混乱が支配的になった社会の状態を生んだ。本来、追従者である「子供」は、父性の権威である「父」と同一化(identification)することによって「連帯」を構築し、その庇護下に入る。しかし父の権威がなければこの連帯は構築できないから、無規範となり、混乱の事態が起こる。つまり社会秩序の崩壊は、無連帯と無規範から起こるのである。父の存在しない社会は混乱状態に陥って、神経症や精神分裂病を招くばかりでなく、政治的無関心(agamy)をも招くのである。今日の日本で、政治的無関心を招いているのは、父性を失ったためである。

また家長制度の崩壊は、「家庭の欠陥」を作り上げた。そしてこうした欠陥家庭で育った青少年は、ついに親殺しに至ったり、子殺しに至り、あるいは理由なき殺人に至るのである。私たちが多くの日本人は、戦後民主主義教育で、平等思想を学んだが、「平等」の本当の意味は、教育が側も、教わる側もついに分からず仕舞いであった。そしてテモクラシー社会における「平等」も然りであった。

では日本を除く、民主主義諸国における「平等」とは、一体なんであるか。まず「平等」とは、身分の格差や、貧富の格差において、自らの人権が差別されない事を言う。また欧米では古くから、教育の中で「鞭打ちの制度」を採用して、これは等しく平等であった。王室出身者の子弟でも、貧困家庭の出身者の子弟でも、同じ教室に入り

そこで教育を受ける場合、王太子であるとも平等に鞭打を受けた。王太子に鞭を打つても、これを柔順(じゆうん)と言う者はいなかった。王室出身者でも、教育における鞭打は避ける事が出来なかった。これは教育の中で、「平等」が叫ばれる以前から、しくく平等であったのである。ところが日本における教育現場の現実はどうであろうか。果たして「平等」はあるだろうか。今や、体罰は人権蹂躪となり、人権と言ふ二文字が「平等」に与えられた権利」を崩壊させている。絶対否定し難い。(独眼竜)

この強者の威厳を以て、中国の保有数は四五〇発である。これはアメリカやロシアに続く、世界第三位である。核の保有は、強者の証であり、古来より人は強者を尊敬する現実がある。

この強者の威厳を以て、中国(中華思想)は世界に君臨しなければならぬ。曾て中国は、その近代史において、日・英・独・仏・米の諸外国に侵略された歴史を持っている。中国人は、この侵略の歴史を忘れてはならない」と憤懣の情を綴り、次に、侵略の恨みこそ、強者への原動力であるとしている。そしてこの原動力を以て、資本主義世界への覇者転覆の計画を実行すると言っていることが遠回しに述べられている。

またこの書は、日本がアメリカ帝国主義の第一奴隷として挙げられ、アメリカの傘の下で擁護されてきたことが克明に記されている。「アメリカ帝国主義を叩くためには、その腰巾着である日本を叩き、日本列島並びに沖縄(この島を日本から切り離して考えていることに注目)を解放しなければならぬ。地下資源の殆どない日本は、そのエネルギーの中枢をなす石油を中東からの輸入に頼っている。そして日本は東シナ海を日本の生命線と位置付けている。

東洋における中国の驚異

(その三十三) イオンド大学教授 曾川和翁

一九九九年に、現役の人民解放軍空軍の上級大佐が書いた。超限戦(人民解放軍空軍の上級大佐・高良)と。国家安全(人民解放軍空軍の上級大佐・王湘穂)という二冊の本が、世界の軍事アナリストの間で注目されることになった。高良の著した「アメリカを仮想敵国とする。超限戦」では、「コンピュータのハッカーの養成で、インターネットや、その他の軍事情報網を攪乱する情報戦に関する具体的な戦術が述べられている。この書物によると、情報攪乱とともに、敵国の金融システムを混乱させる「金融戦」を支柱として、都市破壊のためのゲリラ戦による「新テロ戦」、敵国の国民を動揺させるための「心理戦」、B級化学兵器や細菌兵器による「化学戦」、貿易を制限する「貿易戦」、外交ルートを通じて敵国を封じ込める「外交戦」、産油国や鉱物資源国に圧力を掛けたり、輸送ルートを封鎖する「資源戦」、レーザー光線などを使った新科学兵器による「科学技術戦」、マスコミを利用したり、進歩的文化人を洗脳媒体として文化そのものを破壊する「マスコミ



この内容に要約すると、「一九六四年に、中華人民共和国は国産の原子爆弾を以てその核実験に成功し、世界の尊敬を集める核保有大国となった。その核弾頭の位置付けている。

歴史を工学的に科学する

〒802-0985

北九州市小倉南区志井6丁目11-13

(尚道館ビル2F)

九州科学技術研究所

093(962)7802 FAX093(961)8224

Eメール: science@daitouryu.com



九州科学技術研究所

Kyushu technology Institute

九州科学技術研究所 URL

http://www3.ocn.ne.jp/saigouha/

大東流霊的食養道HP

www.daitouryu.com/syokuyou/

癒しの杜の会HP

www.daitouryu.com/iyashi/